

## 臨床心理学系大学院生の研究活動への意識

さっぽろ駅前クリニック 北海道リワークプラザ 草岡章大

### 要 旨

臨床心理学は実践と研究が不可分に結びついた学問領域である。その臨床心理学を基盤とする臨床心理士を目指す大学院生は、研究と実習・実践に日々多大な労力を傾けている。本調査では、大学院修士課程で臨床心理学を学ぶ大学院生の修士論文を中心とする研究活動への意識態度を、質的研究法を用いて分析した。その結果、修士論文を中心とする研究活動は専門家への成長の証を学生自身に与える一方で、実践と研究は乖離し、修士論文は心理的負担感の強い形骸化した課題であることが示された。そして大学院生にとって修士論文は“通過儀礼”として存在することが明らかになった。今後は大学院生にとって実践と研究の結びつきが実感をもって感じられる訓練方法の確立が重要である。

### I. 現状における課題と調査目的

臨床心理士養成を目的とした財団法人日本臨床心理士資格認定協会による指定大学院は平成19年度時点で156校を数える。各大学院はそれぞれが基礎的カリキュラムに加え、大学院の特色を活かしたカリキュラムを構成して臨床心理士の養成に注力している。そして在籍する大学院生は実践的訓練と研究活動に多大な労力と時間をかけて取り組んでいる。最近では、より実践的な心理臨床教育に重点を置き、課程修了時に修士論文の代わりに事例研究の提出を求める専門職学位課程が平成19年度時点で4校開設されている（日本臨床心理士資格認定協会、2008）。

臨床心理学は科学性を重視してきた伝統的心理学と異なり、“実践性を重視する新たなパラダイムに基づく心理学”（下山、2000）であり、実践と研究が不可分な学問領域である。近年では従来の統計的手法や事例研究に加え、質的研究法などの新しい研究法が用いられるようになり、またこれら研究法の多面的な組み合わせが展開されている。さらには医療における evidence-based medicine（根拠に基づく医療）の概念が心理療法やカウンセリングにも導入され、北米を中心に心理療法やカウンセリングの効果研究が盛んに行われて

いる。これらから、実践と研究はその関係性を一層強めていることが指摘される。一方で下山（2000）は日本の臨床心理学研究の問題点について、事例研究法以外の臨床心理学研究の展開が十分に見られていないこと、臨床心理学研究に関する総合的な解説書自体が出版されていないことの二点を指摘しており、日本における臨床心理学研究は今後の発展に大きな余地と課題を残している。

現在、臨床心理士資格保有者は16,000名を越え、新規取得者も年に1,500名前後で推移している。その活動領域も非常に広範な領域に及び、また公的機関での職員募集要項にも臨床心理士資格が明記される機会も増加しており、社会的要請は高い水準にある。しかしその一方心理職の国家資格化の議論に大きな進展は見られず、臨床心理士は専門職としての社会的位置づけが曖昧なままに職務に従事せざるを得ない現状がある。このような社会に心理臨床活動が根付くためには、客観的有効性を社会に向けて提示していく研究活動は必須の作業である（下山、2000）。その作業は個々の臨床心理士の日頃からの研究活動が担うものであり、その基盤は臨床心理士への訓練段階である大学院での論文作成過程において形成される。

このような現状を鑑みると、今後日本において学問としての臨床心理学、実践としての心理臨床活動がより一層根付くためには、両者がこれまで以上に相乗的に連携することが必要となる。そしてその連携の一翼を担う臨床心理士への訓練段階にある学生にとって、大学院における修士論文を中心とした研究活動がどのように捉えられているのかを把握することは、今後の訓練や教育を検討する上で重要な手がかりになると考えられる。本調査では大学院生の研究活動への意識を明らかにすることを目的とし、さらに今後の臨床心理学系大学院教育における方向性について述べる。

## II. 方 法

### 1：情報提供者

財団法人臨床心理士資格認定協会第一種指定校の指定を受けた大学院修士課程1校に所属する大学院生1年生と2年生の計22名に自由記述式質問紙を配布し、そのうち回答があった1年生7名、2年生11名の計18名が情報提供者として本調査に参加した。平均年齢=25.7歳で、依拠する理論的背景は精神分析学派が12名、人間主義的学派が3名、未記入が3名となっている。就労経験は1名が大学院入学以前に約2年のクリニック勤務経験を有している。大学に付属するカウンセリング・センターでのカウンセリング担当事例数は0件から5件、心理検査・アセスメント担当事例数は0件から3件である。

### 2：調査者

本調査は調査者1名により行われた。調査者は30歳代で臨床心理士資格保有者である。依拠する理論的背景は統合派を志向しており、また質的研究法を5年経験している。本調査に際しては、研究活動は訓練や学問の発展に必須な作業の一つであること、また修士課程における訓練段階であってもより実践的な研究が行われるべきであるとの考えを予め有している。

### 3：調査方法

本調査では自由記述式の質問紙を調査に用いた。質問項目は「大学院入学以前の、大学院での研究活動についてのイメージ」、「自分にとっての現在の研究活動の位置づけと役割」、「研究活動が

臨床活動にどのような影響を与えているか」、の3点である。これらの質問は、大学院生が修士課程における研究活動に対して抱くイメージ、そのイメージと実際の差異の有無、研究活動が自己に何らかの変化を与えうるものであるかを把握することを目的として選択された。質問紙は大学院に付属するカウンセリング・センターに配布と回収を依頼した。質問紙には調査者の連絡先、記入された内容の取扱についての文書が添付された。

質問紙で得られた記述は質的研究法の1つであるグラウンデッド・セオリー (grounded theory, Strauss & Corbin, 1990/1999) を用いて分析された。データ分析の手順は、始めに質問紙毎にコード化 (coding：意味単位と呼ばれる分析単位に含まれる内容を、短く的確な表現に変換すること) が行われた。意味単位は一単語から時には数行に及ぶこともあった。次に各質問紙に付された全ての意味単位及びコードが一覧にされ、類似するコードや意味単位が集められ、一つのまとまり (カテゴリー、category) の生成が行われた。そして生成された各カテゴリーは、類似性が認められるカテゴリー同士が集約されて上位カテゴリーにまとめられる、カテゴリーの統合がなされた。生成及び統合されたカテゴリーは各質問紙の記述を用い、質問紙の内容やそこに示された情報提供者の体験が的確に反映されているかについての検討とコードやカテゴリーの修正を繰り返した。

## III. 結 果

本研究では18名分の質問紙に付された合計104のコードのうち、カテゴリーの生成に93のコードが用いられ、最終的に1つの核となるカテゴリーに集約された (表参照)。

### 核となるカテゴリー：【通過儀礼】

グラウンデッド・セオリーにおいて全てのカテゴリーを包括する核となるカテゴリー (core category) が出現することは、分析の深まりを示す一つの指標と考えられている。本研究では【通過儀礼】という核となるカテゴリーが得られた。修士論文が専門家に必要な知識、態度、技術を習得し、専門家への成長過程に大きな肯定的影響を与え、また専門課程の修了を証明するものとして

表：カテゴリと各情報提供者におけるカテゴリ出現頻度

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	
〔専門性の証〕	〔既存理論の検討〕	●					●	●											
	〈多元的視点〉		●			●			●				●					●	
		〔探 究 心〕					●				●	●				●			
	〈証に裏づけされた自信〉	〔社会的貢献〕	●		●						●	●							●
		〔証〕	●			●				●				●					
		〔専門職への動機付け〕	●		●	●								●	●			●	●
		〔将来の臨床活動の基盤〕		●	●					●	●		●	●	●	●	●	●	●
	〔専門的思考・技能〕	〔自己の問い直し〕	●	●	●														
		〔論理的思考〕					●							●		●		●	●
		〔専門技能〕			●		●						●		●				
〔修了要件を満たすため〕			●	●	●	●		●	●	●	●			●					
〔試 練〕	〔過剰な負担〕		●	●	●			●		●	●	●				●			
	〔高い質を要求される〕	●						●			●		●			●			
	〔追 わ れ る〕									●	●	●				●			
〔実践的訓練の足かせ〕	〔実践を最重視〕		●	●	●				●			●		●					
	〔修士論文の必要性に疑問〕				●			●	●										
	〔卒論の延長〕	●			●									●					
〔イメージ不定〕	〔漠然としたイメージ〕			●	●	●	●											●	
				●	●	●	●												

存在すると同時に、不可避で受身的な、強度の心理的負担として存在し、それをいかに乗り越えるかが重要な主題となっている体験である。〔専門性の証〕と〔鼓舞〕という2つの下位カテゴリーを包括する。この二つのカテゴリーは相反する体験を示すと見なされうが、質問紙の回答との照合過程でこの二つのカテゴリーが示す体験が複雑に絡み合い、また反復的に体験されていることが明らかになったことから核となるカテゴリーとして一つに集約された。尚、本論ではカテゴリーについて、上位から【 】, [ ], < >, [ ]の順に表記している。また「 」で示された箇所は質問紙への回答からの抜粋を示す。

**〔専門性の証〕**：〔専門性の証〕とは、研究活動を通して、これから専門家となるために必要な姿勢や技術だけでなく、専門家としてやっていこうという動機づけや、やっていけるという自信が得られるという体験である。そして修士論文はその執筆過程での体験も含めて、自己が専門家への道筋を歩み、一定の知識・技能を身につけた証明を自己及び他者に示すものとして感じられている。〔専門性の証〕は〈多元的視点〉、〈証に裏づけされた自信〉、〈専門的思考・技能〉の3つの下位カテゴリーが包括されている。

〈多元的視点〉は14名の情報提供者から得られ、〔既存理論の検討〕、〔視点・視野の広がり〕、〔探究心〕、〔社会的貢献〕の4つの最下位カテゴリーが包括されている。先行研究を調査する過程において、先行する理論へ批判的検討を行う中で新たな疑問点が得られ、より詳細を検討したいとの気持ちが生じた。また臨床実践を行っている臨床心理士やその他の専門職をデータ収集対象とした学生は、これまでの自己には無かった新たな視点を獲得することができ、対象者が専門とする領域についての理解が深まっている。さらに論文を完成させて、対象者や研究協力者に「現場の人たちの役に立つような論文にしたい」との思いを抱くに至った。論文作成を通じて新たな視点を獲得しただけでなく、これまでの自己の視点が向けられていた領域以外に主体的に視野を向けられるようになったとの体験も含まれている。

〈証に裏づけされた自信〉は12名の情報提供者

から得られ、〔証〕、〔専門職への動機づけ〕、〔将来の臨床活動の基盤〕、〔自己の問い直し〕の4つの最下位カテゴリーが包括されている。論文の作成過程で体験する苦難やそれを乗り越えた経験が、将来の臨床実践における自己を支え、作成される論文が自己の専門性を証明し、「将来の自分の臨床活動を支える1つの柱」として自己に自信を与えるだろうとの思いを抱いている。また論文作成に付随する苦難の経験から、臨床心理士を目指す自己の能力や適性を問い直し、「将来この方面で働きたいと再確認できた」と将来への意欲が生じている。そして出来上がるであろう修士論文は、自己が苦難を乗り越え、専門性を身につけたことを自他に示す存在となる。

〈専門的思考・技能〉は8名の情報提供者から得られ、〔論理的思考の獲得〕、〔技能の習得〕の2つの最下位カテゴリーが包括されている。論文作成に際して主張を明確化するための論述の進め方を考える過程で論理的思考の方法が身についた。またインタビューによるデータ収集を行った学生は、インタビュー経験を通じて面接技能に直接的な肯定的影響を与えられたことが実感されていた。論文内容との直接的関連は薄いですが、論文作成過程において副次的に習得されたものが自己に肯定的な影響を与えたとの体験が示されている。

**〔鼓舞〕**：実践訓練を重視する一方で、研究活動はあまり重視しておらず、修士論文は大学院を修了するための強制的で不可避な課題であり、また同時に自分がその課題を乗り越えられないのではないかとの恐れを抱いている。そしてこの課題や恐れを乗り越えるため、自己を奮い立たせ、言い聞かせて論文執筆に向かうという体験が、この〔鼓舞〕という体験である。〔鼓舞〕は〈試練〉、〈実践的訓練の足かせ〉、〈イメージ不定〉の3つの下位カテゴリーを包括している。

〈試練〉は14名の情報提供者から得られ、〔修了要件を満たすため〕、〔過剰な負担〕、〔高い質を要求される〕、〔追われる〕の4つの最下位カテゴリーが包括されている。修士論文は大学院を修了するための要件の一つであり、避けることができない課題であるとの思いを抱いている。さらに修了要件の一つであるため、「卒業するためにはや

らなきやいけないもの。正直やりたくないなと思っていた」と動機づけの低さが示されている。しかし大学院であるという意識から、論文には高い質が要求されていると感じている。さらに時間的な切迫感も加わって、論文を完成させられないのではないか、論文を完成させても質の面で基準を満たすことができないのではないかとこの恐れを抱いている。さらには自己の能力への懐疑を抱くこともあった。論文作成を通じて自己の能力が試されており、その苦難を乗り越えねばならないとの体験が示されている。

〈実践的訓練の足かせ〉は9名の情報提供者から得られ、[実践を最重視]、[修士論文の必要性に疑問]の2つの最下位カテゴリーが包括されている。大学院に入学した目的は現場で働くためであり、「将来は研究者ではなく、現場で働きたいと思っていた」ため研究論文を書く意義が見出せないこと、さらには論文作成が足かせとなってカウンセリング事例数を希望よりも減らさねばならず、実践訓練を積みたいという希望が阻害され残念だとの思いを抱いている。論文の存在が大学院生の実践訓練を積もうという意欲的な歩みの足を引っ張るものであるとの体験が示されている。

〈イメージ不定〉は10名の情報提供者から得られ、[卒論の延長]、[漠然としたイメージ]の2つの最下位カテゴリーが包括されている。大学院入学時に研究計画書を提出していたが、その後も大学院という機関における研究活動に具体的なイメージを抱くことができないままであった。このイメージが不十分なことによって不安が喚起され、心理的負担感が強まることもあった。また論文の完成形が想像できず、常に暗中模索をし続ける苦しさや不安が先行する体験も示唆されている。

### 事例紹介

上記のカテゴリーは事例横断的に得たものであり、個々の情報提供者像がとらえにくい。そこで、【通過儀礼】及び【専門性の証】、【鼓舞】それぞれの特徴が見られる2事例について質問紙への回答の一部を抜粋して掲載する。尚、事例掲載においてはプライバシーの保護を優先し、内容の理解

に支障をきたさない範囲での修正が行なわれている。又、事例のアルファベット表記はカテゴリー表の表記に対応している。

#### 1：大学院生Cの事例

修士課程2年目の大学院生Cは、大学院入学期に本格的に臨床心理学を専攻した。大学院生Cは大学院入学以前の研究活動へのイメージとして「難しそうなもの」であり、「自分にこんなことが出来るのか」という困難さのイメージや不成功への恐れを感じていた。大学院生Cは修士論文について、「卒業（修了）要件のひとつ」であり、「実習や実践の方が研究よりもはるかに大切」と考えていた。しかし一方で研究活動は「よい実践を行うための土台を作るという意味で研究は無くしてはならない」と、自己の臨床実践の土台となるものであるという肯定的影響も感じている。また研究活動を通して「新人セラピストとしてレベルアップできる」と、研究活動が自己の専門家としての成長に貢献するものとして考えていた。大学院生Cにとって修士課程での研究活動とは「生涯学び続ける、研究し続ける臨床心理士としての姿勢を身につける」という、専門家としての意識を醸成するものであった。大学院生Cは実際に修士論文研究を進める過程で、本格的な臨床心理学の専攻が初めてであることに起因する「臨床心理士に向いていないのでは？」という自己への疑念や将来への不安が払拭され、「自分の資質を必要以上に卑下せず済んだ」と感じている。また研究方法に面接を導入したことで、「人との話し方が多少上手くなった」と自己の技術が伸長したことを実感している。

この大学院生Cの事例では実践訓練が重視される一方で修士論文は恐れを感じるものであり、自分が希望する実践的訓練とはかけ離れたものであった。しかし同時に研究活動から将来の臨床活動実践の土台、姿勢、専門家としての意識の高まりを経験している。さらに実際の論文執筆作業によって自己の能力への疑念が払拭され、専門家への成長に結実するものとして体験されている。

#### 2：大学院生Hの事例

修士課程2年目の大学院生Hは、大学卒業後すぐに大学院に進学している。大学院生Hは大学院

入学以前には研究活動について「あまり想像していなかった」と、具体的なイメージが形成されていない状態で大学院へ進学した。しかし大学院生Hにとって修士論文は「学部レベル以上の論文を求められるから大変」なものであり、「修士課程を修了するために論文を書く」ものであった。強制的課題であることで心理的負担感が先行し、論文作成過程の只中においてもその意味合いが希薄であることがうかがわれた。さらに「今やっていることが臨床現場でどのくらい役に立つのか正直わからない」、「研究も大切だとは思いますが、自分にとってそれほど重要であるという気はしていない」と述べている。実践を重視する自分が進めている研究が臨床実践からかけ離れたものであり、そこから研究活動の存在意義を見出すことは困難であり、意欲は低下し、形骸化した修了要件としてのみ存在するとの態度を有していた。一方で実際に修士論文を進める中で、「文献を読むことでもちろんとても勉強になっている」と自己の知識の拡大は実感されている。

この大学院生Hの事例では、大学院への入学以前から研究活動に対して懐疑的な認識を抱いていた。そして実践的訓練を最重要視していたために、研究活動が自己の実践訓練を進める上での足かせとして感じられた。しかし一方では論文作成過程において文献を読むことが自己の知識の拡大に結実していると述べ、論文作成過程に肯定的意味合いを見出し、自己に必要且つ有用なものであると言いつつ、動機づけを高めようとしている面もうかがわれた。

#### IV. 考 察

##### 通過儀礼としての修士論文

本調査の結果からは、修士論文の一つの役割として、大学院生にとって自己の専門性を証明するものとして存在することが挙げられる。研究活動や修士論文の作成という行為から専門的な技能や視点を習得し、その後の専門職へと進む際の自信を喪失するものであり、大学院生個人の専門家への成長に大きく寄与することが示された。大学院生Aは回答の中で「修士論文を通して得たことや、そのプロセスを大切にして、将来の自分の臨床活

動を支える一つの柱とする」と述べている。この回答や大学院生C及び大学院生Hの2事例からは、論文作成が大学院で学んだことの成果をまとめ、また将来の専門家としての自己を支える柱や土台を形成する作業であるとの態度が指摘される。そして修士論文を作成する期間に付随して体験される不安や恐れ、自己疑念、重荷感を乗り越える経験がその後の自己の成長に結実するものと考えられる。この点からは修士論文作成過程には危機が内包されており、その危機の克服や危機からの脱出がこの期間の重要な主題であることが示されている。

通過儀礼とはファン・ヘネップ (van Gennep, 1909/1977) が用いて以来一般化した文化人類学における概念である。綾部 (1987) はこの通過儀礼という概念について、人生の節目の通過に際して、その平安を保障する目的で行われる一連の儀式であり、それぞれの節目に課された条件を満たしながら通過し、新しい役割や身分を獲得しつつ成長を遂げることをその目的として挙げている。そしてこの通過儀礼という概念には、儀礼を通過したことによって身分が変わった人間に対し、新しい責任が生じたことを認識させる役割があることを指摘している。本調査の結果からは、修士論文には専門家という新しい身分への成長を促し、自信を喪失し、職業への動機づけとなり、専門家として必要な姿勢を自己に再認識させる役割が付与されていることが示された。修士論文及びその執筆過程の体験には、学生にとって専門家への過渡期に付随する成長や危機が象徴的に表現されていると捉えることが可能である。

修士論文が、否定的な体験や危機を内包しながらも自己の視点や技能を伸張させ、専門家としての土台を形成し、大学院生個人の専門家への成長に少なからず寄与することが示された一方で、論文や研究活動自体への意義が希薄化していると考えられる側面も強調される。本調査の結果には研究成果についての視点が欠けていることが指摘される。修士論文が単なる修了要件の一つとして見なされ、研究活動が果たす本来の意味は喪失し、大学院生にとっては心理的負担感が先行する課題であることが示唆されている。

本調査から訓練段階にある大学院生にとって実践と研究は乖離し、実践訓練が強調され、研究が単なる大学院修了のための形骸化した通過儀礼的課題と感じられていることが指摘される。このような問題の背景には大学院生が研究の意義や研究と実践とのつながりが実感を持って見出せず、研究活動に興味関心や意欲をもてないことが大きな要因として考えられる。

### 実践的研究の可能性と教育への導入

臨床心理学は研究によって深化し、それが実践にフィードバックされることによってより高い有効性を発揮するという構造を持つ実践的学問である。しかし先述の大学院生Hの事例における「研究も大切だとは思いますが、自分にとってそれほど重要であるという気はしていない」との回答に代表されるように、研究活動が実践的訓練の足かせとして体験されていることが示された。大学院生は臨床心理学や臨床心理士には研究も重要であることは一般論として十分に理解している一方、その興味関心の殆どは実践的訓練に注がれている。この点に臨床心理学の学術的側面と実践的側面の関係が実感を伴って理解されておらず、両者が乖離した状態にあることの一部が示されている。そして大学院生にとって修士論文や研究活動が苦難の作業であり、強制的で不可避な課題であるとの負担感を伴って体験されているならば、この乖離がより増大する方向へと向かうことは想像に難くない。この乖離を減少させ、大学院生に臨床心理学の学術的側面と実践的側面の関係が実感を伴って理解されるためには、研究活動や修士論文が大学院生にとって強い興味関心を喚起し、また自己の成長に大きく寄与すると感じられるものであることが重要である。

この課題への取り組みの一つに実践的研究が挙げられる。臨床心理学は実践的学問であるため、当然研究主題も実践から導き出されることが多い。しかしこれまで述べたように訓練段階にある大学院生にとって実践性と研究は乖離しており、両者の関係性が実感を伴って理解されてはいない。岩壁（2004）は、修士課程では臨床経験も少ないため、実践的研究といっても難しいものの、

初学者であっても心理臨床実践に関係する疑問は少なからず起こるはずであると述べている。そして、これらが研究課題へと変換できるということ、そしてそれを実証的な枠組みを与えることによって検証可能であるということ意識して実践と研究について考えることが大切であり、研究と実践が不可分であることを示すことが今後の臨床訓練の課題であることを指摘している。本調査の結果では大学院生の一部に修士論文について学部卒業論文の延長であるとのイメージを抱いていることが示された。学部卒業論文は多くが基礎的研究法の習得をその趣旨としている。しかし大学院は実践的訓練の場であり、且つ研究の場でもある。それ故、研究課題においてもより実践的な内容が扱われるべきである。そして実践に関する疑問を研究課題へと変換して実証的枠組みの中で検証可能であることが理解されたならば、それは実践的訓練を重視する大学院生に大きな興味を喚起しうるものになる。

実践的研究が大学院生の教育訓練に肯定的な可能性を有すると予測される一方で、それを訓練や教育にどのように組み込むかについては十分な議論と検証が必要である。この点について、岩壁・小山（2002）は“事例研究は科学的研究の出発点として臨床家の訓練において有益である”と述べ、事例研究から実証的研究への変換作業を訓練に導入することを提案している。具体的な方法の一つとして、大学院で行われているケースカンファレンスを活用することが挙げられる。訓練段階である大学院生においてもケースカンファレンスで事例を検討する中で、「なぜこのクライアントはカウンセリングに継続的に来談しているのか」、「なぜセラピストはここでこの言葉を用いたのか」、「セラピストの言動をクライアントはどう受け取ったのか」など、多様な疑問が生じる。これらの疑問は生きた事例を検討することによって導かれた、生きた疑問である。この生きた疑問を、研究法に関する講義、ゼミナールや研究室での時間において議論し、疑問の中心点が何かを深めることが重要である。そして大学院生が感じた疑問が研究課題として成立しうるかを考察し、調査対象、方法、データの種類と分析方法など適切な研究の

枠組みを検討し、時には実際に研究計画書を作成することも必要である。これら一連の過程全体が非常に貴重な実践的教育であり、また実践的研究へと結実するものである。

## V. 本調査の問題点と今後の展開

本調査は大学院1校に在籍する修士課程1年生及び2年生を対象として行われた。この点に大きく一点目の問題が挙げられる。大学院はそれぞれのカリキュラムに独自の力点を持っており、研究への教育方針にも大学院によって差があると予測される。さらに博士課程の有無も修士課程学生の研究への意識態度に大きな影響を与える要因である。また本調査は修士課程1年生と2年生を区別せずに行われた。修士課程2年生は実際に論文作成中であり、研究活動への意識も当然1年生のそれとは大きく異なると考えられる。大きく二点目はデータ分析過程の問題である。本調査は分析者一名で行われた。通常グラウンデッド・セオリーなどの質的研究法においてはデータ分析の偏向を減少させるため、複数のデータ分析者や質問紙などを併用し、トライアングレーション (triangulation) という手法が重要視される。これによってデータ分析の信用性 (dependability) を確保するが、この点においては本調査の結果の信頼性への疑問は免れない。しかし本調査の目的は大学院生が修士論文を中心とした研究活動全体にどのような意識態度を有するかを把握することを目的としており、完全とは言えないまでもこの目的は果たされていると考えられる。

今後の展開としては、複数の情報源でのデータ収集を行い、博士課程の有無、年次による意識の変化についても検討することが望ましい。これらによって大学院における学生の研究意識についてより包括的な理解が可能になると考えられる。また大学院を修了し実際に臨床実践を行っている臨床心理士を対象として研究への意識について調査することも、臨床心理学教育を考える上で非常に重要な資料となる。

## VI. 結 語

臨床心理士への訓練段階である指定大学院のカ

リキュラムにおいては、実習や実践的教育が強調される一方で研究に関わる内容は相対的に取り扱いが小さい。このような状況において大学院生は臨床実践から研究主題を抽出する方法や、それらを具現化する研究方法の学習不足により、研究立案以前の段階から苦慮し、心理的負担感や嫌気が先行する状態となっている。そしてそれらは学生の興味を相対的に実践的訓練に向かわせる一因ともなっている。このような現状があるならば、学生に研究の大切さを説くよりもその興味や意欲を活用する方法を模索すべきである。本論ではその方法の一つとして実践的研究の教育への導入について述べた。大学院という教育課程での高度な専門家の育成において実践的研究という方法論は大きな可能性を有しており、その活用に十分な議論と検討が重ねられるべきである。

臨床心理学という領域名には「臨床」と「学」の字が入っており、実践と学問が不可分であることが直接的に表現されている。将来的な臨床心理学の発展を考えると、大学院での臨床実践と研究活動を結びつける作業は必須のものであり、その方向性と方法論について重点的な検討が必要である。

最後に、本調査を実施した動機は筆者が大学院生の時分の研究体験が現在の臨床実践に非常に大きな肯定的影響を与えていること、また身近な心理臨床家や大学院生と修士論文研究の臨床実践への活用について議論したことがその発端となっている。これから修士論文に取り組む大学院生にとって研究活動が単なる“いい思い出”で終わらず、後の自己の臨床実践に多くの肯定的影響を及ぼしうるものであることを願う。

## 謝 辞

本調査に参加協力くださった大学院生の皆様、そして本調査実施を快諾し、ご協力くださった大学院関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

## 文 献

- Van Gennep, A. (1909): *Les rites de passage*  
Paris: Emile Nourry. 綾部恒雄・綾部裕子訳  
(1977) 通過儀礼 弘文堂.

- 綾部恒雄（1987）：通過儀礼 石川栄吉・梅棹忠夫・大林太良・蒲生正男・佐々木高明・祖父江孝男（編著）文化人類学事典 弘文堂。
- 岩壁茂（2004）：クライアントの初回面接の体験—札幌学院大学心理臨床センターにおける実践的研究の取り組み— 札幌学院大学心理臨床センター紀要, 4, 1-16.
- 岩壁茂・小山充道（2002）：心理臨床研究における科学性に関する一考察 心理臨床学研究, 20(5), 443-452.
- 木下康仁（1999）：グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生 弘文堂。
- 木下康仁（2003）：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 弘文堂。
- 日本臨床心理士資格認定協会（2008）：平成19年度の事業報告と20年度に向けて 臨床心理士報, 19(1)
- 下山晴彦（編）（2000）：研究の方法論 臨床心理学研究の技法 シリーズ・心理学の技法 福村出版。
- Strauss, A & Corbin, J (1990) : Basics of Qualitative Research: Grounded theory Procedures and Techniques. Sage Publications. 南裕子・操華子（訳）（1999）質的研究の基礎—グラウンデッド・セオリーの技法と手順. 医学書院。